

翻訳にあたってのヒント

その 14

英語のいろいろな構文について

一昔前、「日本の製品は一流だが、それらのマニュアルはジョークだ」と言われた時期があったといわれています。こんなことが言われたのは戦後の高度成長期から 1970 年代までのことだったと思われませんが、その原因の一つが稚拙な英訳にあったということは容易に察することができます。当時どれほどの技術英語に関する辞書、用語集、参考書があったかは寡聞にして知りませんが、少なくとも今現在巷にあふれているほどの量ではなかっただろうし、技術系の英語を教わることができる翻訳学校や通信教育もあまりなかっただろうし、海外への観光旅行や留学などは夢のまた夢で、英語をかじったことがある人たちや英文科を出た人たち（当然ながら技術英語とはまったく無縁の教育を受けた）を使ってとにかく何が書かれているのかを伝えたいがために、とりあえず英訳させたのもその原因ではないかと思われまます。これに加え、翻訳にあたってのヒントその 7 でも書いた通り、専門用語と日常会話で用いられる用語の乖離率（馴染みの度合い）が、英語が 25%強、日本語が 55%強であるということから、一見平易な英文に見えても「準技術用語（apply, clear, feed, give, get, have, involve, offer, provide, rate, unit, work, etc.のようなごくごく平凡な英単語）」と呼ばれるものの用法が分野や業界別に広範囲にわたって使われ、訳語が一義的に（日本語と英語で一対一で）決まることがなく異質な使われ方をすることがあるということも適訳できなかつた原因だと思われまます。

しかし、経済の発展とともに、英米の大学で理工学を学んだ留学組が増えたり、別に海外へ行ったことがない人たちでも翻訳学校や通信教育、莫大な量の参考書などで実務翻訳を学び立派に通用する英語が書ける人たちが翻訳業界で活躍していたり、インターネットで簡単に海外の文献が調べられる時代が到来したりと、時代は様変わりしつつあります。

こんな状況であっても、やはり日本語と英語が月とスッポンほど違う言語であることに変わりなく、それぞれに特異な対応表現法、日進月歩で進化する技術革新、頻出する新しい言い回し、日本企業の海外進出、外国企業の日本市場への参入、国際分業化の進展等と相まって翻訳業界も時代の流れに遅れまいときりきり舞いの様相を呈しています。

技術英文を読み取るには、いわゆる工業英語なるものを勉強しなければなりません。そのために必要なことは、技術的な素養はもとより、技術用語に関する知識、そして構文に関する知識（文法）です。前者二つは、直接客先や関係者に問い合わせたり、資料、参考書、辞書を揃えたり調べものをしたりすれば何とかなる類のものかもしれませんが、構文の知識となるとそうはいきません。技術英語の読み書きをするには、どうしても翻訳者個人の文法の力量によらざるを得ないからです。

以上の理由から、今回は英語の構文を話題に取り上げた次第です。

代表的な英語の構文は以下の通り。

1. With の付帯構文
2. As の付帯構文
3. 分詞構文
4. 不定詞構文
5. 動名詞構文
6. 受動態構文と能動態構文
7. 名詞構文（無生物主語構文を含む）
8. 関係詞を含む構文
9. 否定構文
10. 条件構文
11. 比較構文
12. 省略構文
13. 共通構文
14. 倒置構文
15. 譲歩構文
16. 対比構文
17. that を含む構文
18. 因果構文
19. 強意構文
20. 一致構文
21. 反復構文
22. 挿入構文、etc.

それぞれの詳しい説明は省きますが、大学を含めて普通の学校では絶対に教えてくれないこれだけの構文をそれぞれの膨大な数の実例や例文も含めて、多大な時間や金を費やして習得しなければならないのですから、自分で言うのも何ですが翻訳業とは大変な商売だと思つづく思います。

以上、翻訳一口メモでした。